

仲町小 学校だより



メールアドレスe-mail : nakacho-e@saitama-city.ed.jp

ホームページアドレス<http://nakacho-e.saitama>

窓ぎわのトットちゃん

校長 河野 秀樹



本校の学校図書館（夢色文庫）は、いつも活気があります。手提げに入れた本を大事そうに抱えながら教室と4階を行き来する子どもたちは、いつも笑顔です。学校図書館司書の藤島さんは図書の整備だけではなく、図書館の使い方を説明したり、読み聞かせをしたりと図書の利活用の充実にむけて日々取り組んでいます。藤島さんの話では、新しく購入した本への興味は強く、新しい本のコーナーには多くの子どもたちが嬉しそうに集まっているそうです。今年1月に実施したさいたま市学習状況調査で「読書が好き」と肯定的な回答をした本校の子ども割合は、市に比べ全ての学年において良好でした。また、今年度4月に6年生が実施した全国学力・学習状況調査でも「読書が好き」と肯定的な回答をした本校の子ども割合は、全国や県に比べて良好でした。仲町小の子どもたちは日頃から読書に親しみ、読書が好きな子が多いようです。

最近、俳優で司会などでも活躍されている黒柳徹子さんの子ども時代を描いた自伝的小説「窓ぎわのトットちゃん」を再読してみました。すると、学生時代とは違ったところに関心が向きました。それは、小学校を退学になってしまったトットちゃんが新しく通うことになったトモエ学園の小林校長先生の言動です。校長先生は初めてトットちゃんに会ったとき、「さあ、なんでも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」と言います。退屈せずに身を乗り出しながら、たっぷり4時間話を聞いてくれました。また、トットちゃんがトイレに落ちた財布を取ろうと柄杓でくみ出して山を作っていると、「何しているんだい」しばらくして「あったかい？」と声をかけ、友達のような声で「終わったら、みんなもどしとけよ」と、言って歩いていってしまう。校長先生はトットちゃんを信頼して怒らないで対応していました。小林校長先生の言動が気になったのは、おそらく私が歳を重ねたというだけではなく、職業柄感情移入する人物が変わったからだと思います。

10月には、このトットちゃんの続編「続 窓ぎわのトットちゃん」が42年を経て出版されました。その中で、本とのかかわりについてこのような一節があります。

- トットの家では、お菓子の買い食いは禁じられていたけど、本をツケで買うのは許されていた。ギッシリと詰まった本棚に目をこらし、一冊一冊手に取って「これ！」と思う本が見つかったら、レジのところ座っているおじさんに、「黒柳ですけど、この本ツケにしてください」とお願いする。そして、手にした本を胸に抱えて、家に駆けもどるのだった。
- ロシアの文豪アントン・チェーホフの「兄への手紙」も、好きな作品だった。「眼には見えないもののためにも心を痛める」ことが大切だと書いてあった。チェーホフの考える「やさしさ」がトットにも伝わってきて、やさしい人間になるには教養を身につけなくてはならないし、そのためには本を読むことが大事だと考えるようになった。

10月から11月にかけて読書週間があります。図書委員会の5・6年生が中心になって様々な取組も行われます。子どもたちにはこれをきっかけに、図書館に足を運び、様々な本に囲まれる時間や空間を楽しんでみたり、友達や先生と本の話に花を咲かせながら新たな知識を得たり豊かな心を育んだりしてほしいと願います。

追記：図書館の入り口には、本が原作となっている映画のチラシが掲示されており、子どもたちも興味をもって見えています。その中に、この「窓ぎわのトットちゃん」があります。原作がいかにかアニメーションで表現されるのか…12月の公開が楽しみです。

参考資料：「窓ぎわのトットちゃん」

黒柳徹子 講談社

「続 窓ぎわのトットちゃん」

黒柳徹子 講談社